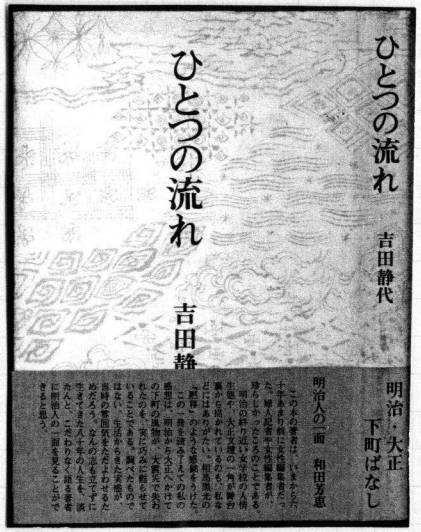
吉田静代　よしだしずよ　小説家、雑誌編輯者。明治二十四年七月十五日東京日本橋蠣殻町生れ（一八九一―）。旧姓松井。筆名うきくさ、うきくさ女、小牧葉、月草女、松井静代、紅露園。跡臺英和女學校、實践女學校、東京女醫學校等に學ぶ。十七歳頃から雑誌『女子文壇』に投稿。抒情文「菜の香」が一等になるなど、服部貞子（水野仙子）、山田くに子（今井邦子）等と上位を競ひ、選者の小栗風葉からは鬼才の評を得た。大正二年河井酔茗に招かれ女子文壇社に入る。『女子文壇』は酔茗が退いて吉田常夏が編輯に當つた九月號から『處女』と改題して内容も一新したが、傍系の雑誌編輯等に多忙な常夏に代つて實質上の編輯責任者となり、執筆、投稿選者、果ては口繪モデルにおそなつて活躍。翌年常夏と結婚。その後も諸誌に斷はり小説等に筆を執つた。また文藝芸者として賣り出した夢子の代作者となつた。

編著『料理小説集』、回想録『ひとつの流れ』（昭和五十）二年九月）二十日光風社書店）がある。